



地元住民ら約350人が集まったトークショーで赤米への思いを語る相川さん

歌手

相川七瀬

総社赤米大使



守り続けてきた伝統を

子どもたちに伝えていく

総社赤米大使に委嘱

総社市に伝わる古代米の赤米。その赤米を保存・活用し、後世に伝えていくため、6月15日、歌手の相川七瀬さんを総社赤米大使に委嘱しました。

委嘱式を新本の本庄国司神社で開催。片岡市長から任命状が手渡され、相川さんは「先祖代々守り続けてきた伝統を子どもたちに伝えていくのが、私たち大人の役割」と話しました。今後、赤米を通じて、人と人、親と子などの「つながり」をテーマとしたプロジェクトを計画していきます。

この日は、新本小学校5年生10人といっしょに同神社の神田で赤

米の田植えを体験。また、新本小学校で就任記念トークショーも行いました。

神事として残る赤米

赤米は新本の本庄と新庄の両国司神社の氏子が栽培し、神様に奉納。この行事が赤米の神饌として、県の無形民俗文化財に指定されています。現在、赤米を奉納する神事が残っているのは、新本のほか長崎県対馬、鹿児島県種子島の2か所。相川さんは昨年8月、このうちの対馬を訪れ、赤米の話聞き興味をもちました。その際、赤米を継承する人の高齢化が進んでいる現実を知り、「昔から脈々と続いてきた文化の継承がなくなるのでは」と、危機感を覚えたとい

子どもたちに残していく

神事がほかに種子島と総社にも残っていると知った相川さん。「神事として地域に根付いていることはすごく大事なことです。日本人のあるべき姿を子どもたちに残してあげたい」と、赤米を継承する3か所を応援したいと思うようになり、今回の赤米大使委嘱につながりました。

赤米にかける人



「あかおもち」の苗を植える
難波尚吾さん

赤米の利用価値を高め総社をPRしたい

上原で赤米を栽培している難波尚吾さん、友子さん夫妻。赤米を使って総社市の特産品を作ろうと昨年、東京からUターン就農。倉敷農業普及指導センターやJA岡山西農協などと連携して赤米を栽培しています。今年は、県が品種改良したもち品種の赤米「あかおもち」や、うるち米品種の赤米を計約53㌦作付け。3月には自ら「レッドライスカンパニー株式会社」を設立し、赤米を使った米粉や塩麴などの製品を販売しています。「赤米大使に相川さんを迎え、これから赤米がもっとメジャーになってほしい。私たちの挑戦もまだ始まったばかり。これからもがんばります」と、難波さんは話します。

相川さんは昨年11月にも本庄国司神社を訪れ、稲刈りに参加しました。「小学生が田植えや稲刈りをしている姿を見て、地域でつながっている、ほかにはない総社の力を感じた。これからは総社がリーダーシップをとって発信できることがたくさんあるのでは。私もいい形でつないでいけるようアイデアを出していきたい」と、今後の赤米の発展を願いました。また、赤米応援ソング「ヒカリノミ」を自ら作詞。人と人とのつながりや、命の大切さなどの思いが詰まった曲です。この曲は11月にリリースされるアルバムに収録される予定。赤米大使就任記念トークショー後にも披露されました。



田植えをする新本小学校5年生と相川さん

Nanase Aikawa 相川七瀬

1995年「夢見る少女じゃいられない」でデビューして以来、現在までのCDトータルセールスは1200万枚を超えている。毎年7月7日には、「七瀬の日」と題したLIVEをSHIBUYA-AXにて7年連続で開催中。